# 思考法のコペルニクス的転回

## ――カントに於ける超越論的認識の一考察――

松本長彦

### 一　問題設定

現代日本語に於いて、「コペルニクス的転回」という語は、教養をもつ人々の間では一般的に使用される言葉である。一般的に使用される場合、この語は、ものの考え方の転換、しかも従来の考え方を一八〇度ひっくり返すような転換という意味で用いられている。[1] しかし、哲学研究者にとっては常識であり、比較的大きな国語辞典には示されていることであるが、この「コペルニクス的転回」という語は、元々はカントが『純粋理性批判』に於いて提唱した考え方を指すものであった。[2] 実際、カント自身「コペルニクス的転回」という表現は使用していないが、『純粋理性批判』[3] 第二版の「序文」(Vorrede) に於いて、コペルニクス (Nicolaus Copernicus, 1473-1543) が天文学に於いて果たした考え方の転換を紹介しつつ (B XVI.)、哲学・形而上学の分野に於いても「思考法の革命」(Revolution der Denkart) (B XII.)、「思考法の変更」(Umänderung der Denkart) (B XVI.) 或いは「考え方の変更された方法」(die veränderte Methode der Denkungsart) (B XVIII.) を導入すべきことを述べている。

「これまで、あらゆる我々の認識は対象に従わねばならない（alle unsere Erkenntnis müsse sich nach den Gegenständen richten）[4]、と想定されていた。しかし、対象に関して、それによって我々の認識が拡張されるであろうような或ることを、概念によってア・プリオリに決定しようとする試みは、この前提の下では、ことごとく水泡に帰したのである。それ故、我々は形而上学の課題に於いて、対象が我々の認識に従わねばならない（die Gegenstände müssen sich nach unserem Erkenntnis richten）、と想定することによって、より上手くいくかどうか、一度試してみてはどうであろうか。この〔対象が我々の認識に従わねばならない、という〕想定は、対象が我々に与えられる前に対象に関して何事かを確定しなければならない形而上学のア・プリオリな認識の、要求される可能性と、非常に良く合致するのである。これは、コペルニクスの最初の思想と事情は全く同じである。コペルニクスは、星群全体が観測者の周りを回転していると想定した場合には、天体運動の説明が上手くいかなかった。そこで彼は、観測者を回転させ、反対に星を静止させた場合には、より上手く成功しないであろうかと、試みたのである（der [sc. Kopernikus], nachdem es mit der Erklärung der Himmelsbewegungen nicht gut fort wollte, wenn er annahm, das ganze Sternheer drehe sich um den Zuschauer, versuchte, ob es nicht besser gelingen möchte, wenn er den Zuschauer sich drehen und dagegen die Sterne in Ruhe ließ）。」（B XVI.）

このカントの記述を見る限り、カントが提唱した「思考法の革命」等々、即ち所謂「コペルニクス的転回」（より正確には「思考法のコペルニクス的転回」と言うべきであろう）とは、多くの国語辞典が示しているように、コペルニクスによる所謂「天動説」（地球中心説）から所謂「地動説」（太陽中心説）への発想の転換に倣う思考法の転換を指していることは、間違いないであろう。

しかし、例えば『精選版日本国語大辞典』に示されているような、

「主観は対象に従いそれを映すとする従来の考え方を逆転させ、対象が主観に従い、主観の先天的な形式によって構成されると主張して、これを天動説に対して、地動説を主張したコペルニクスの立場になぞらえた。」[5]

という語釈は、一般的な解説としては分かりやすいであろうが、カント解釈の上では或る種の違和感を抱かせるものである。その違和感とは、コペルニクスに於ける思考法の転回とカントに於けるそれとの間の、以下のような意味のねじれに起因する。

既に引用したように、カントは、「コペルニクスは、星群全体が観測者の周りを回転していると想定した場合には、天体運動の説明が上手くいかなかった。そこで彼は、観測者を回転させ、反対に星を静止させた場合には、より上手く成功しないであろうかと、試みたのである。」(B XVI.) と説明している。つまり、従来は観測対象（星）が回転していると考えられていたのを転換して、観測者を回転させたというのである。これを科学史上の知識と重ね合わせれば、観測対象は恒星であり太陽でもある。また観測者は地球に位置している。従って、コペルニクスに於ける思考法の転回は、《太陽が地球の周りを回っている》という見方から、《地球が太陽の周りを回っている》という見方への転換ということになる。所謂「天動説」から「地動説」への思考法の転回である。

これに対して、カントが提唱した思考法の転回は、従来の「あらゆる我々の認識は対象に従わねばならない」という想定を捨てて、「対象が我々の認識に従わねばならない」という想定を採用するということである。ここで使用されている「認識」と「対象」という語は、「主観」と「客観」と置き換えた方が分かりやすいかもしれない。つまり

カントは、《主観が客観に従わなければならない》という考え方をやめて、《客観が主観に従わなければならない》という考え方を採用することを提唱しているのである。

コペルニクスとカントの思考法の転回をパラレルなものと考えるとしたら、《太陽が地球の周りを回っている》という考え方が《主観が客観に従わなければならない》という想定に対応し、《地球が太陽の周りを回っている》という考え方が《客観が主観に従わなければならない》という想定に対応することになる。この場合、単純に考えれば、「AがBの周りを回る」から「BがAの周りを回る」への転換と、「AがBに従う」から「BがAに従う」への転換がパラレルになるわけであるから、Aに相当するものは「太陽」と「主観」、Bに相当するものは「地球」と「客観」である。しかし、コペルニクスの場合、当然のことながら「観測者」は「地球」に位置しているわけで、むしろ彼の発想を忠実に跡づけようとするならば、「地球」と「主観」とが同一視されるのが自然である。しかし、実際に同一視されるのは、「地球（観測者）」と「客観」である。つまりここでは、「主観（認識）」と「客観（対象）」の位置づけに関して、逆転現象が起こっている。この意味で、コペルニクスの思考法の転回とカントのそれとの間には、意味のねじれが存するのである。

この問題に対する最も簡単な解決法は、「太陽」と「主観」、「地球」と「客観」という意味の対応関係を無視することであろう。カントの所謂「思考法のコペルニクス的転回」の眼目は、コペルニクス流の「AがBの周りを回る」から「BがAの周りを回る」への転換に倣って、「AがBに従う」から「BがAに従う」への転換を行うこと、つまりAとBとの関係を逆転させることであって、両者の転換に於いてAやBに該当するものが意味的な連関をもつかどうかは、どうでもよいことである。こう考えるならば、問題は何も発生しない。そして、或るレベルのカント解釈ならば、それで十分であろう。

しかし、そのように解釈することによって、我々は、カントがコペルニクスの名を引き合いに出して伝えたかったことを、捉え損なってしまうのではないだろうか。カントが真に意図したことを見落としているのではないだろうか。

## 二　コペルニクスに於ける思考法の転回

我々はもう一度、コペルニクスが天文学に於いて成し遂げた成果を、簡単に確認しておこう。

コペルニクスの時代（一六世紀前半）、ヨーロッパのキリスト教文化圏に於いて正統と認められる天文学（及びその惑星運動理論）には、二つの流れがあったとのことである。一つはアリストテレスの自然学に由来するもの、もう一つはプトレマイオスの天文学に由来するものである。[6] しかし、そのいずれに於いても、地球は宇宙の中心に位置する不動の存在と見なされていた。所謂「天動説」即ち「地球中心説」が、絶対に正しい理論とされていたのである。また、古代ギリシア以来の天体観・宇宙観に基づいて、天上界にある天体は完全な運動を行うものであり、完全な運動とは円運動であるという考え方も共有されていた。そのために、太陽や月、さらには天空にちりばめられた諸々の恒星群の方が、地球の周りを回転している（地球を中心とする円運動を行っている）と考えられた。太陽は、一日に一回地球の周りを回転する。月はもう少し複雑であるが、これもほぼ規則的に回転している。また恒星群は、季節による星座の見え方の違いから分かるように、見かけ上ほぼ一日に一回地球の周りを回転しているが、その周期は正確に一日一回ではない。この回転周期のずれから、見かけ上太陽はほぼ一年で一回天空上を大きく回転することになる。「地球中心説」に従っても、ここまでは、季節年（例えば或る年の立春から次の年の立春までの一年間）と恒星年（太陽が、他の恒星群に対する相対的な位置関係に於いて、天空を一周して同じ位置に帰るまでの一年間）とのずれの問

題などが、暦を編纂する上での問題としてあるにせよ、[7] さほどの困難はないと言えよう。太陽、月及び恒星群は、地球を中心とする円軌道に沿って回転している、という単純で美しい宇宙像が成立するのである。

古来天文学者たちを悩ませてきたのは、惑星の見かけ上の運動である。今日の我々の知識では地球より内側の軌道に存在することが分かっている「内惑星」（水星と金星）もそれなりに複雑な軌道を描くが、地球より外側の軌道に位置する「外惑星」（火星、木星、土星）[8] は、天空の恒星群との相対的位置関係に於いて極めて複雑な軌道を描く。見かけ上「順行、留、逆行、留、順行」という、まさに文字通り「惑わせる星」或いは「彷徨い歩く星」（planet の語源）と名づけられるに相応しい、奇怪な運動を呈する。コペルニクスの時代に到るまで、いやより正確には、コペルニクスの時代を通り越して、ケプラー（Johannes Kepler, 1571-1630）の惑星運動理論が確立されるまで、天文学者たちは、何とか惑星の運動を地球を中心とする宇宙像の中に整合的に定位する努力（試行錯誤）を続けていた。しかし、とりわけ「地球中心説」に立ち、天体は完全な運動である円運動を行うという、古代ギリシア以来の宇宙観に囚われていた、コペルニクス以前の天文学者たちにとって、観測結果に基づく惑星の軌道を、上述の地球を中心とする宇宙像の中に組み込むことは、極めて困難な作業であった。コペルニクス以前の天文学を支配していたパラダイムであるプトレマイオス（Ptlemaios Klaudios, A. D. 2 C.）の『アルマゲスト』（*Almagestum*）に於いて解決方法として提示されたのは、地球を中心とする円を「誘導円」とし、その誘導円上に中心をもつ「周転円」の円周上に惑星を位置させるという方法であった。[9] しかし、観測結果と正確に一致させるためには、誘導円は一つでは足りず、最初の誘導円周上に中心をもつ二次誘導円の円周上に中心をもつ周転円の円周上に惑星を位置させる、しかしそれでも不十分で、いくつもの誘導円を描いて、等々というように、惑星の軌道を円を組み合わせることによって描くことが、延々と試みられていたのである。この結果、惑星の軌道は、観測結果にかなり近い形で描かれたが、それは無数の円を組み合わせた

複雑なものであり、太陽や恒星群の単純で美しい円運動の軌道とはかけ離れたものとなっていった。

このような状況下で、コペルニクスは、その科学史上有名な著書『天球の回転に関する六巻の書』（*De revolutionibus orbium caelestium Libri VI*. 1543.）に於いて、従来は「観測者」が位置している地球が不動の中心点にあり、その周りを天体が回転していると考えられていた（所謂「天動説」即ち「地球中心説」）のを、それでは天体の運動（特に惑星の運動）が整合的に説明できないという理由から、天球に位置する恒星群は不動であると仮定し、さらに太陽を不動の中心に据えて、「観測者」が位置している地球とその他の惑星とが太陽の周りを回転すると考えた（所謂「地動説」即ち「太陽中心説」）のである（当然のことながら、この場合、地球には公転と自転という二種類の運動が考えられることになる）。簡単に言えば、《太陽が地球の周りを回っている》という考え方を捨てて、《地球が太陽の周りを回っている》という考え方を採用したのである。即ち、コペルニクスは、観測者は不動で観測対象（天体）が動いているという立場（所謂「天動説」）を捨てて、大部分の観測対象（太陽を含む恒星群）が不動で（当然、月や地球以外の惑星という一部の観測対象は動いているが）、観測者の側（地球）が動いているという立場（所謂「地動説」）に考え方を転換したわけである。

これは、根本的な思考法の転換であり、天文学上の革命であった。確かに、コペルニクス自身は、天体の運動は円運動であるという、古代ギリシア以来の考え方に囚われており、やはり「誘導円、周転円、離心円」という「プトレマイオスと同じ幾何学的な道具」[10]を使って惑星の運動を説明しようとしたために、理論と観測結果の完全な一致を実現することはできなかった。また、これは当時のキリスト教（カトリックとプロテスタントの双方）からの非難を緩和するための口実とも考えられるが、コペルニクス自身が、従来のアリストテレスに由来する惑星運動理論とプトレマイオスに由来するそれと併置する形で、自説を第三の可能な理論として展開しようとしたこと、また、この「太陽

中心説」は、彼だけのオリジナルな思想ではなく、既に古代ギリシアの思想家によって述べられているという事実を示唆していることも、指摘しておかねばならない。[11] しかし、これらのことは決して彼の科学史上に於ける功績を貶めるものではない。彼の思考法の転換が、科学的認識を飛躍的に進歩させ、より整合的な宇宙像の形成に決定的に寄与したことは、紛れもない事実である。

我々にとっての問題は、このコペルニクスに於ける思考法の転回を、哲学的にどう評価するかである。カントの言う、「コペルニクスは、星群全体が観測者の周りを回転していると想定した場合には、天体運動の説明が上手くいかなかった。そこで彼は、観測者を回転させ、反対に星を静止させた場合には、より上手く成功しないであろうかと、試みたのである。」(B XVI.) ということの真意とは、一体何であろうか。

運動の相対性という、近代物理学の基本的な考え方を踏まえれば、「天動説＝地球中心説」でも「地動説＝太陽中心説」でも、どちらの説明方式でもかまわないはずである。プトレマイオスが「地球中心説」を選択する論拠とした運動学上の理由は、「慣性系」(inertial system) という考え方を導入することによって、論拠としての資格を失うであろう。従って、どちらの理論を選択するかは任意であるが、「天体運動の説明」を「より上手く」行える理論を採用するべきである、とカントは言っているのであろうか。周知のことであるが、カントの卒業論文『活力測定考』[12] 及び初期の著作『天界の一般自然史と理論』[13] に於いて、カントは、師であるマルティン・クヌッツェン (Martin Knutzen, 1714-51) から学んだニュートン物理学の研究成果を基に理論を展開している。その意味で、ニュートン物理学はカント哲学の出発点に位置していると言うこともできよう。そのニュートンが、そして現在我々が、コペルニクスが主張した「太陽中心説」を修正した理論を採用しているのは、より簡潔でより整合的な理論の方を選択しているからにすぎない、とカントは考えていたのであろうか。確かに、科学理論は、より簡潔でより整合的な説明方式が、真なる

理論として選択されるべきであろう。だが、カントが言っているのは、それだけのことであろうか。

この問題に正しい解答を与えるために、我々はカントが『純粋理性批判』に於いて成し遂げた所謂「思考法のコペルニクス的転回」の内実を検証してみなければならない。

## 三　思考法の革命とア・プリオリな認識の基礎づけ

カントが言う所謂「思考法のコペルニクス的転回」とは、既に述べたように、「あらゆる我々の認識は対象に従わねばならない」という従来の想定を捨てて、「対象が我々の認識に従わねばならない」という新たな想定を採用するということである。

確かに、「実践的認識」(praktische Erkenntnis)は、「対象を実現する」(ihn [sc. Gegenstand] wirklich zu machen)(B X.)即ち「その認識によって私は、何が存在すべきであるかを表象する」(... dadurch ich mir vorstelle, was da sein soll, ...)(A 633, B 661.)のであるから、確かに認識が対象に先行し、実践的認識に基づいて対象が存在すると言うことができる。つまり、対象が認識に従うと言うことができる。しかし、『純粋理性批判』が主に取り扱っている「理論的認識」(theoretische Erkenntnis)は、「対象及びその概念(これは他から与えられねばならない)を単に規定する」(diesen [sc. Gegenstand] und seinen Begriff (der anderweitig gegeben werden muß) bloß zu bestimmen)(B IXf.)即ち「その認識によって私は、何が存在するかを認識する」(... dadurch ich erkenne, was da ist, ...)(A 633, B 661.)のであるから、単純に考えれば、理論的認識に於いては、対象の存在(das Dasein des Gegenstandes)が認識に先行するはずで、むしろ「認識は対象に従う」と言わねばならないはずである。これがカント以前の哲学者たちの発想であった。これを逆

転させ、「対象が認識に従う」と言うことで、何をカントは主張しているのであろうか。

前の段落で「理論的認識」と「実践的認識」の説明のために引用した「超越論的弁証論」の箇所に続いて、カントは理性の「理論的使用」と「実践的使用」の相違について、次のように述べている。

「理性の理論的使用というのは、私がそれによって或るものが有ることをア・プリオリに（必然的として）認識する使用であり、実践的使用とは、それによって何が起こるべきであるかがア・プリオリに認識される使用である。」（... ist der theoretische Gebrauch der Vernunft derjenige, durch den ich a priori (als notwendig) erkenne, daß etwas sei ; der praktische aber, durch den a priori erkannt wird, was geschehen solle.）（ebd.）

ここで着目すべきことは、理性の理論的使用に於いては、「或るものが有ることを」私が「ア・プリオリに（必然的として）認識する」ということである。当然、「理論的認識」と「理性の理論的使用」とは全く同じ概念ではないが、理性を理論的に使用した結果得られる認識が理論的認識であるから、ここでカントが述べているのは、理性を理論的に使用した場合、理論的認識として、「或るものが有ること」（daß etwas sei）についてのア・プリオリ（必然的）な認識が得られるということである。つまり、ポイントは「ア・プリオリな認識」（Erkenntnis a priori）にある。

もし理論的認識について、「認識が対象に従う」という立場をとり続けるならば、ア・プリオリな認識は不可能と言わざるをえない。何故なら、対象の存在が全面的に認識を規定する場合には、対象の存在を認識の側に受け入れる手段が問題となるが、その手段は「経験」（Erfahrung）以外にないからである。ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）を始めとするイギリス経験論の哲学者たちが主張したように、理論的認識に於いては、対象に関しては「実際

に経験してみなければ分からない」という言い方が、全面的に正当なものとなる。つまり、理論的認識はすべて「経験的認識」(empirische Erkenntnis) 即ち「ア・ポステリオリな認識」(Erkenntnis a posteriori) としてのみ成立可能ということになる。しかし、経験的認識は、デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711–76) の指摘を待つまでもなく、「普遍妥当性」と「必然性」という学的認識にとって不可欠の性格を欠いている。[14] それ故にカントは、学的認識の可能性を基礎づけるために、「ア・プリオリな認識」の可能性を求めざるをえなかったのである。

従って、「対象が認識に従う」と発想を転換するというカントの主張は、「ア・プリオリな認識」の可能性を基礎づけるためになされている、と言うことができる。実際のところ、既に引用したコペルニクスの天文学上の業績云々に先立つ箇所でカントが述べているのは、まず、数学 (Mathematik) と自然学 (Physik oder Naturwissenschaft) とが、「その客観をア・プリオリに規定しなければならない、理性の二つの理論的認識」(B X.) であり、そのいずれもが、「思考法の革命」(Revolution der Denkart) によって、ア・プリオリな理論的認識の体系 (＝学 Wissenschaft) の道を歩み始めたことである (Vgl. B X–XIV.)。また、コペルニクスの天文学上の業績云々に続く箇所で述べられていることも、基本線は変わらない。問題は「形而上学」(Metaphysik) という学問領域に移るが、そこでも「思考法の革命」によってア・プリオリな理論的認識が可能となることが論じられていることに変わりはない (Vgl. B XVI–XVIII.)。即ち、この『純粋理性批判』第二版の「序文」に於いてカントは、「思考法の革命」によってア・プリオリな理論的認識が可能となることを、一貫して述べているのである。

## 四　思考法の革命と実験的方法

では、ここでカントが提唱する「思考法の革命」とは一体何であろうか。それは、彼が「実験的方法」(Experimentalmethode)(B XIII Anm.)と呼んだ考え方を、学的認識の基礎づけのために哲学に導入することである。そしてカントは、数学及び自然学の分野ではこの実験的方法の考え方が既に導入されており、それによってこれらの学は学として成立していると述べている。

数学に於いては、

「彼〔二等辺三角形を最初に論証した人〕は、彼が図形に於いて見るものを、或いはまた図形の単なる概念を追跡して、いわばそれから図形の諸性質を学び取るのではなく、彼が概念に従って自らア・プリオリに考え入れ描出したものによって(構成によって)、〔対象即ち二等辺三角形を〕産出しなければならないということを、そして確実に何かをア・プリオリに知るためには、自分が概念に従って物事の中に置き入れておいたものから必然的に帰結したこと以外の何ものをも物事に付け加えてはならないということを、見出したのである。」(B XII f. 〔　〕内は筆者補足。)

自然学に於いては、

「理性はただ、自分がその計画に従って産み出したものだけを理解するのであり、また理性は不変の法則に従う

自己の判断の原理によって自然を導き、理性の問いに答えるように自然を強制しなければならないということを、自然科学者たちは理解したのである。」(B XIII.)

「かくして自然学さえも、その思考法のかくも有益な革命を、もっぱら次のような着想に負わねばならなかった。即ち、理性は、自然から学ばなければならないことを、そしてそれについて理性自身だけでは知ることはないであろうことを、理性自身が自然の中に置き入れたものに従って、自然に於いて求める（自然に対して捏造するのではなく）、という着想に。」(B XIIIf.)

以上の記述から見て取れるように、「実験的方法」とは、自然科学の実験と同様に、予め理性が自らの内にもつ概念や法則（原理）を、対象の側に「考え入れ」(hineindenken)、「置き入れ」(hineinlegen) て、それによって対象を「構成し」(konstruieren)、そして予め自らが投げ入れた概念や法則を、構成された対象の本質としてア・プリオリに認識するという方法である。

そしてカントは、形而上学に於いても同様に実験的方法を採用し、理性のもつ原理を対象のうちに「考え入れ」、「置き入れる」ことによって、ア・プリオリな認識の可能性が基礎づけられることを述べている。

「さて、形而上学に於いても、諸対象の直観に関して、同様の仕方で試みることができる。…（中略）…（感能の客観としての）対象が我々の直観能力の性質に従わねばならないとすれば、私はこのような（アプリオリな認識の）可能性を十分に考えることができるのである。しかし私は、これらの直観が認識となるべきならば、これらの直観のもとに止まることはできず、むしろ表象としてのこれらの直観を対象としての何か或るものへと関係

させ、この対象をそれらの直観によって規定しなければならないが故に、…（中略）…諸対象が、或いは同じことであるが、そこに於いてのみこれら諸対象が（与えられた諸対象として）認識されうる経験が、これらの概念に従っている、と私は想定する。そうすれば、私は即座により容易な解決法を見出す。何故ならば、経験自身が悟性を必要とする一種の認識様式だからである。そして、その悟性の規則を、私は自らの内に、私に諸対象が与えられる以前に、即ちア・プリオリに、前提しなければならないのであるが、この規則は、経験のあらゆる諸対象がそれに従わねばならず、それと一致しなければならないところの、ア・プリオリな諸概念に於いて表現されるからである。」（B XVI–XVIII.〔　〕内は筆者補足。）

「我々が物についてア・プリオリに認識するのは、我々自身が物の中に置き入れたものだけである。」（… wir nämlich von den Dingen nur das a priori erkennen, was wir selbst in sie legen, …）（B XVIII.）

後に『純粋理性批判』本文に於いて論じられる内容を踏まえて言えば、「直観能力の諸性質」とは、我々の感性的直観の形式であり純粋直観でもある「空間と時間」であり、「悟性の規則」とは、「ア・プリオリな純粋悟性概念」即ち「カテゴリー」及びカテゴリーに基づく「純粋悟性の諸原則」である。「空間と時間」及び「カテゴリー」は、我々の認識を成立させる《認識の原理》であり、基本的制約である。しかし同時に、我々の感性的直観の対象即ち「現象としての物」（Ding als Erscheinung）に関しては、「空間と時間」及び「カテゴリー」によって、我々の認識の対象が構成される。それ故に、直観形式である「空間と時間」及び純粋悟性概念である「カテゴリー」は、我々の認識の対象（あくまでも「現象」としての対象）の存在形式を根源的に規定する《対象の本質》をなすものである。我々は、自らの内に予めもつ「認識の諸制約」を対象の内に「置き入れ」、それによって対象を対象として認識する。しかし、

同時にその「置き入れ」た認識の諸制約を《対象の本質》としてア・プリオリに（感覚的経験に依存することなく）認識する。この場合、対象の存在と認識との関係は、対象の存在が認識の諸制約に依拠していることになる。この意味で、「対象が認識に従う」と言われうるのである。この事態を簡潔に表現するのが、「超越論的分析論」の有名な「経験一般の可能性の諸制約は、同時に経験の諸対象の可能性の諸制約である。」(... die Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung überhaupt sind zugleich Bedingungen der Möglichkeit der Gegenstände der Erfahrung, ...)（A 158, B 197.）という一文である。

もっとも、認識と対象との間にこのような関係が成立するのは、あくまでも「現象」としての対象に関してである。我々の感性的直観の制約（空間と時間という直観形式）を捨象して想定された対象の在り方即ち「物それ自体」(Ding an sich selbst) に関しては、我々はそのような対象を構成することができないために、このような関係は成立せず、そのような対象についてのア・プリオリな認識も基礎づけられない。

「それらが単に理性によってしかも必然的に思惟されるが、（少なくとも理性がそれらを思惟するようには）まったく経験に於いては与えられえない限りでの諸対象に関して言えば、これらを思惟しようとする試みは（ともかくもそれらは思惟されることはできるはずであるから）、我々が考え方の変更された方法（die veränderte Methode der Denkungsart）として想定したことの、つまり我々が物についてア・プリオリに認識するのは、我々自身が物の中に置き入れたものだけであるということの見事な試金石を後に提供するであろう。」（B XVIII.）

## 五　思考法のコペルニクス的転回と超越論的認識

以上の考察を踏まえれば、カントに於ける所謂「思考法のコペルニクス的転回」とは、我々の認識の諸制約（感性と悟性がもつ認識の原理）が、認識の対象を構成する《対象の本質》であり、そのことに基づいて、ア・プリオリな理論的認識（学的認識）の可能性が基礎づけられることを示すところに、その意義があった。その際に、「認識が対象に従う」という立場から「対象が認識に従う」という立場へと、一八〇度の見方の変更が行われることも確かである。しかし、この立場の変更は、単純に「対象」の側から「認識」の側に移るという、いわば水平方向での移動を意味しているわけではない。むしろ、認識が可能になるための制約と対象が可能になるための制約とを探究するという、いわば垂直方向への態度変更が、その根底には存しているのである。

ところで、アプリオリな認識を基礎づけるための、認識と対象、主観と客観の存在の根拠への超越とでもいうべき態度変更、それはカントが言う「超越論的認識」(die transzendentale Erkenntnis) に他ならない。

「私は、諸対象にではなく、むしろ諸対象一般についての我々の認識様式に、それがア・プリオリに可能であるべき限りでの我々の認識様式に関与するすべての認識を、超越論的と名づける。」(B 25.)

「すべてのア・プリオリな認識が超越論的と呼ばれるのではなく、或る表象（直観或いは概念）がもっぱらア・プリオリに使用される、或いは可能であること及び如何にしてそうであるか（即ち、アプリオリな認識の可能性或いはアプリオリな認識の使用）を、我々がそれによって認識するところのア・プリオリな認識だけが、超越論的と呼ばれるべきである。」(A 56, B 80.)

「超越論的認識」とは、簡単に言えばア・プリオリな認識の可能性を基礎づける認識のことである。カントが所謂「思考法のコペルニクス的転回」とか「実験的方法」という言葉で実現しようとしたこと、それはこの超越論的認識を得ることであった。それ故に、「思考法のコペルニクス的転回」に於ける転換とは、単純に「対象（客観）に依拠する」ことから「認識（主観）に依拠する」ことへと発想を切り替えることではない。むしろ我々の認識の側で、認識が対象に依拠して成立する部分と、認識能力自身がもつ制約に依拠して成立する部分を切り分け、さらにその制約が同時に対象が可能であるための制約でもありうることを、まさに認識すること（超越論的認識）である。その意味では、素朴に対象の存在を受け取って成立すると考えられてきた理論的認識から、認識自身が身を引き離し、自らを《対象についての認識》と《その認識自身についての認識》へと二重化し、《対象についての認識》を《その認識自身についての認識》によって基礎づけるという態度変更が、この所謂「思考法のコペルニクス的転回」の真の意味なのである。

そして、このような態度変更は、コペルニクスに於ける思考法の転回に於いても見出すことができる。実はコペルニクスの場合も、太陽と地球という二つの天体のどちらを中心に据えるか、ということだけを問題にしているのではない。むしろそこで行われている思考法の転回とは、感覚に与えられた、つまり見かけ上の天体運動をそのまま真の運動と見なすのではなく、知性的な操作を加えることによって、知性（つまりは認識能力）によって理論的に構成された実際の天体運動を基にして、感覚に与えられる見かけ上の天体運動を説明するということである。つまり、太陽と地球という、現象間の水平的な関係項のどちらを選択するかが問題なのではなく、むしろそのような水平的な関係が成立する根拠への垂直的な認識に於ける超越こそが、この思考法の転回の本質と考えることができるのである。

それ故に、カントがコペルニクスの名前を挙げて、自らの「思考法の革命」をコペルニクスのそれになぞらえよう

としたとき、カントの脳裏にあったのは、このような現象の根拠への超越を目指す思考法の転回であったと考えることができるのである。

## 六　結　語

以上の考察によって我々は、本論文の「一」に於いて指摘した、カントとコペルニクスの思考法の転回の間に存する「意味のねじれ」の問題にも解答を与えることができる。もし両者の思考法の転回が、水平方向（対象→認識、地球→太陽）で行われるものであれば、両者の間にはむしろ転回の方向が逆ではないかという不自然さが残る。また、カントとコペルニクスの思考法の転回は、ただ単に今までの発想を逆転したという、いわば表面的な類似関係をもつにすぎない。しかし、既に考察したように、両者の転回とは、現象の根拠への超越を目指す根本的な態度変更であり、まさに「思考法の革命」と呼ぶに相応しいものであった。そこには、単に表面的な類似関係に止まらない、深い本質的な関係を見て取ることができるのである。

### 注

（1）例えば、比較的コンパクトな国語辞典では、次のような語釈が施されている。

「地動説を主張したポーランドの天文学者コペルニクスの立場になぞらえて、従来の考え方とは、見方を根本的に変えて、画期的な局面を展開しえたとき、その過程を言う語。」（『現代国語例解辞典〔第二版〕』小学館、一九九三年、四五六頁。）

「〔Copernicus=地動説を提唱した天文学者の名〕従来の意見や通説をすっかり逆の方向に変えること。百八十度の転回。」（『新明解国

語辞典〔第四版〕』三省堂、一九八九年、四四八頁。）

（2）例えば『精選版日本国語大辞典』では、

「【ドイツ Kopernikanische Wendung の訳語】①カントが自分の認識論上の立場を特徴づけた言葉。主観は対象に従いそれを映すとする従来の考え方を逆転させ、対象が主観に従い、主観の先天的な形式によって構成されると主張して、これを天動説に対して、地動説を主張したコペルニクスの立場になぞらえた。②従来の考え方とは根本的に異なる画期的な考え方。また、その状況。」（『精選版日本国語大辞典』第一巻、小学館、二〇〇五年、二一一三頁）

また、『広辞苑』第五版では、

「①〔哲〕カントがその「純粋理性批判」の認識論において、主観が客観に従うのではなく、逆に客観が主観に従い、主観が客観を可能にすると考えたことを、天動説から地動説へのコペルニクスの転回にたとえて自ら称した語。②ものの考え方が、がらりと正反対に変ることにいう。」（『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年、九九九頁）

という語釈が施されている。

（3）Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. 以下、本書からの引用は、Philosophische Bibliothek Bd. 37a), hrsg. von Raimund Schmidt, Hamburg 1956. により、慣例にならって第一版（一七八一年）の頁数をA…、第二版（一七八七年）の頁数をB…という形で、本文中に指示する。他のカントの著作よりの引用は、所謂『アカデミー版カント全集』（*Kant's Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften）により、同全集の巻数と頁数を、AA. Bd…, S…という形で指示する。

（4）ここでは sich nach etwas richten を「～に従う」と訳したが、何人かの『純粋理性批判』の翻訳者がそうしているように、「～に依拠する」と訳すこともできる。意味的には、認識が対象に依拠して成立すると考えるべきなのか、それとも対象が認識に依拠して成立すると考えるべきなのか、ということが問題なのである。

（5）『精選版日本国語大辞典』第一巻、小学館、二〇〇五年、二一一三頁

（6）A・アーミティジ『太陽よ、汝は動かず―コペルニクスの世界―』（奥住喜重訳、岩波新書、一九六二年）一三六―一三七頁参照。

（7）アーミティジ、前掲書、一四七―一四八頁参照。

(8) 天王星（Uranus）が、ドイツ生まれのイギリスの天文学者ハーシェル（Frederic William [Friedrich Wilhelm] Herschel, 1738-1822）によって発見されたのは、奇しくもカントの『純粋理性批判』初版が出版された一七八一年のことである。従って、コペルニクスの時代には、外惑星は三個しか認識されていなかった。

(9) アーミティジ、前掲書、四三頁参照。ただし、プトレマイオスは、地球を円の中心に置かない「離心円」の考え方も、彼以前のギリシアの天文学の成果に基づいて取り込んでいる。従って、「地球を中心とする」という表現は、厳密には正確性を欠くかもしれない。また、古代ギリシアの天文学者の中には、ヘラクレイデス（Herakleides, B.C. 4 C.）やアリスタルコス（Aristarchos, B.C. 4-3 C.）のように「太陽中心説」をとる者もいた。プトレマイオスは、太陽中心説の可能性は認めながらも、自らは運動学上の理由から「地球中心説」をとるとしている。（『世界大百科事典』Hitachi Digital Heibonsha, 1998.「プトレマイオス」の項目参照。）

(10) アーミティジ、前掲書、一四六頁。

(11) アーミティジ、前掲書、一三六―一三七頁参照。ここでは、「太陽中心説」を唱えた古代ギリシアの思想家として、ヘラクレイデスとアリスタルコスの名が挙げられている。さらに、厳密には「太陽中心説」とは言えないが、「中心火」を説いた、ピュタゴラス派の思想家フィロラオス（Philolaos, B.C. 5 C.）の名も挙げられている。コペルニクスは、手稿の中で彼らの思想について述べているとのことである。

(12) Kant, *Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte und Beurteilung der Beweise, deren sich Herr von Leibniz und andere Mechaniker in dieser Streitsache bedient haben, nebst einigen vorhergehenden betrachtungen, welche die Kraft der Körper überhaupt betreffen*. Königsberg 1746.

(13) Kant, *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels oder Versuch von der Verfassung und dem mechanischen Ursprunge des ganzen Weltgebäudes, nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt*. Königsberg/Leipzig 1755.

(14) Vgl. Kant, *Prolegomena*., Vorwort, AA. Bd. 4, S. 257-260.